

社会的笑いに関する心理学研究の動向

目白大学大学院心理学研究科 李 珊
目白大学社会学部 渋谷昌三

【要 約】

本稿は、これまでの社会的笑いに関する心理学研究を、①笑いの分類、②社会的笑いの機能、③自然な笑いと作り笑いの差異、④笑いの発達、⑤笑いの識別、⑥笑いと文化の6つの視点から概観した。笑いの分類については笑いを分類した研究を概観し、表出者の感情状態に注目した。社会的笑いの機能については社会スキルとして表出されている笑いの研究を表出者の意図、目的の視点で紹介した。自然な笑いと作り笑いの差異については、顔面表出の静的（static）と動的（dynamic）の両方面から強調した。笑いの発達については、人間の笑いは外界と無関係に生じる段階から社会性を持つようになる過程を述べた。笑いの識別については、発達の視点を入れて笑い識別についての研究をまとめ、子どもの笑い識別についての研究はまだ稀であり、今までの研究では一致な結果が得られなかったため、今後の研究においては子どもの表情識別の解明、などの課題を挙げた。最後に、笑いと文化について、社会的笑いに関する心理学研究の多くは主にアメリカやヨーロッパで行われていて、表情解読についての文化差についての検討がなされなかった問題を挙げた。この現状にあたっては、独特な笑い文化を持つアジア圏における社会的笑いの機能や識別力についての研究も期待されている。

キーワード：笑い、楽しい笑い、作り笑い、社会的笑い、表情識別

I. 緒言

笑いはわれわれの生活と共にある。面白いことを感じたとき、久しぶりの友人や家族と再会したとき、何かの困難を乗り越えたとき、遊園地で好きな乗り物を乗ったとき、射的場でピンを倒し、よいスコアを出したときには笑顔が浮かべる経験があるように、笑いはそもそも楽しかったり、うれしかったりを表現するポジティブな感情表出行動として認知されている。しかし、笑いは自分自身の快感情はもとより、他人の行動に対して「笑う」という表現を通じて、自分の意思を伝えることにも使われている。例えば、街中で偶然に会った知り合いと挨拶したとき、会社の上司のつまらない冗談を聞いたとき、失敗した仲間を励ましたとき、謝る友人を許したとき、気に入らないプレゼントをもらっ

たときに笑いを示すような経験も少なくないであろう。このように、笑いは単純に快感情を表現するだけでなく、さまざまな社交機能を果たしている。Ekman（1985 工藤力訳 1992）は自然な笑い以外に、社会的な意味を持つ笑いを18種類確認し、笑いの種類は全体で50種類もあると指摘している。

これゆえ、社会的な場面において表現された笑いの文脈的な意味を理解し、多様な笑いを正確に識別することは観察者にとって困難な場合もある。その識別の失敗は、誤解を招いたり、コミュニケーションを混乱させたりするかもしれないので、笑いがどのような感情の下で生じたのかを理解することは重要である。自然な笑いを作り笑いの差異は顔面筋肉の動きの部位やタイミングから脳波の変化までの研究が挙げら

れる。われわれは笑い表出の発達にしたがってこれらの差異を手がかりとして相手の笑い表情を観察、知覚している。しかし笑い識別に関する研究のほとんどは欧米で行われていて、日本人の笑い識別の過程を詳しく検討する研究はほとんど行われていない。笑いとは文化は関係が深く、文化的取り決めによってつくられる微笑の解釈や、その解釈を行う際に生じた認知バイアスに影響を与える要因、さらにその解釈が社会的場面において観察者の行動への判断に至る影響についての解明は、これから研究が進められなければならない領域である。

本稿では、日本文化における笑いに対する知覚、そしてそれによる認知の個人差や行動変容の解明を目的とした研究の基礎として、これまでの社会的笑いに関する心理学研究を①笑いの分類、②社会的笑いの機能、③自然な笑いとして作り笑いの差異、④笑いの発達、⑤笑いの識別、⑥笑いとは文化の6つの観点から概観し、社会的笑いに関する心理学研究の現状と課題を考察する。

Ⅱ. 笑いの分類

笑いは、笑い声の有無による分類、意思の笑いとは感情の笑い(浅田, 2004)、正常な笑いとは異常な笑い(角辻, 1996)など、研究者によりさまざまな分類されている。Giles & Oxford (1970)は笑いの生じる状況によって、ユーモアに対する行動的反応として生じる「滑稽笑い(humorous laughter)」, 笑う人を特定の社会集団に統合させるのに役立つ行動的反応として生じる「社会的笑い(social laughter)」, 自分の無知を隠すための行動的反応として生じる「無知の笑い(ignorance laughter)」, 特定の不安喚起状況における緊張解消の行動的反応として生じる「不安の笑い(anxiety laughter)」, 一般的に是認されていない行為をした人や異常な身体的行動的属性をもつ人に対する、直接的損傷として生じる、または、それとなくあてこすりを行った後の防衛的な意味からの行動的反応として生じる「嘲笑(derision laughter)」, 防衛的な意味から、特定の行動を弱めるための「弁解笑い(apologetic laughter)」, くすぐられるときに生じる「くすぐり笑い(tickling)」の7種類

に分類している。また、志水(2000)は、笑いを「快の笑い」, 「社交上の笑い」, 「緊張緩和の笑い」に三分類し、さらに快の笑いを「①本能充足の笑い②期待充足の笑い③優越の笑い④不調和の笑い⑤価値逆転・低下の笑い」に、社交上の笑いを「①協調の笑い②防衛の笑い③攻撃の笑い④価値無化の笑い」に、緊張緩和の笑いを「①強い緊張が緩んだ時の笑い②弱い緊張が緩んだ時の笑い」に、下位区分している。

これらの笑いに対する分類の試みから笑いの複雑さや概念の大きさが感じられる。笑う人の感情状態に着目すると、Giles & Oxford (1970)と志水(2000)の笑いの分類は快感情を伴う楽しい笑いとは快感情を伴わない作り笑いとは2種類に大別できるであろう。社会的相互作用の場面において、単純に快感情を表現する笑いより、さまざまな社交機能を果たす笑いの方が重大な意義を持っていると考えられる。そこで本稿では、快感情を伴わない笑い、及び社会的機能を持つ笑いに注目する。

この意味で「笑い」の分類を再検討する研究は、早川(2000)が挙げられる。早川(2000)は「笑い」について自・他の領域を仮定することにより、その対人相互行為上の機能をA仲間づくりの「笑い」, Bバランスの「笑い」, C覆い隠す「笑い」の3種に分類している。自・他の領域への出入りと「笑い」が付加される発話内容の視点からさらにA仲間づくりの「笑い」をA-1: 共有期待の「笑い」(自分の話題に誘い込むときの「笑い」), A-2: 共有表明の「笑い」(相手の話題に同意するときの「笑い」), A-3: 共通認識確認の「笑い」(「楽屋落ち」のようにわかっている者にだけわかる「笑い」)に; Bバランスの「笑い」をB-1: 自己の「恥」「照れ」による「笑い」, B-2: 相手に対する「厚かましきさ」による「笑い」, B-3: 儀礼的「笑い」に; C覆い隠す「笑い」をC-1: 自己の話題に対する「ごまかし」の「笑い」とC-2: 相手の話題に対する「とりあえず」の「笑い」に区分している。早川(2001)はこの3種の分類と付加された発話の属性とのクロス分析を行った結果、「親疎」関係において、A類の「笑い」は親しい間柄に頻出し、B類は「普通」の間柄に頻出することを見出している。場面属性においてA類

は雑談、B類はミーティングに頻出することを見出している。「年齢」関係においては、A類は同年齢の者に対して、B類は自分より年上の者に対して、多く出現することが数量的に実証されている。この結果から、「相手にいやな思いをさせたくない」という日本人の笑い心性が窺えるといえる。これらの分類を踏まえて、さらにⅢでは笑いの表出者の意図や目的の視点から社会的笑いの持つ機能についての研究をまとめていく。

Ⅲ. 社会的笑いの機能

Ekman & Friesen (1975 工藤力訳 1987) は表情コントロール技法の考察により社会的笑いの機能を挙げている。Ekmanらは、人は自分の感情を表出する表情をコントロールすることで他者に影響を及ぼそうとするが、コントロールする表情の中でも笑い、特に微笑が重要な役割を果たしていると指摘している。例えば、自分の感情表出の注釈として人はよく笑いを見せる。怒った表情をした後に故意に微笑むことがあるのは、自分の怒りがそれほど強くはないことを補足的に伝えようとしているのであり、恐怖や悲しみの表情を示した後で故意に笑顔を見せるのは、自分が恐怖や悲しみに耐えられることを他人に知らせる注釈行為といえる。また注釈とは別に、真の感情を隠蔽、擬装するためにも笑いは使われる。面白く感じていないのに空笑いする(擬態)、悲しみや恐怖の感情を他人に悟られないようにするために笑顔を見せる(隠蔽)などである。快感情を伴わない笑いについては、心理臨床場面において、内面と表出のずれについて注目されており、うつ病患者の特徴としてさまざまな研究がなされている。例えば、うつ状態にある人は生後最初に出現する「快の笑い」が減少するが、「社交上の笑い」は失っていないことが示されている(坂本・河崎・志水, 1992; 坂本, 1995)。うつ病に陥る人の病前性格として、勤勉、几帳面、まじめ、責任感が強いなどのほか、他人に対する心遣いが強く、良好な関係を保とうとする傾向が大きいことが指摘され(志水, 2000)、それは礼儀正しい態度や、人の見る目を気にするなどの形で現れるが、このような傾向も表出と関連があると思わ

れる。彼らは気分が落ち込み、話したくない時でも相手を大切にし、微笑みを浮かべ対応する(志水, 2000)。また、うつ病の中でも特に若い女性に多いのが「ほほえみうつ病」「仮面うつ病」だと言われている。彼らは内面的にかなり苦しんでいても、表面上は明るく振舞ってしまう(鈴木, 2001)。他人から一見自然に見える表情も、本人にしてみたら、内面とのずれを大きく感じつつも、努力して表情を作っていることもあるといえる。

しかしながら、快感情を伴わない笑いはいくつ病者に限らず、われわれの日常生活においても一つの社会的スキルとして頻繁に表出されている。Provineは笑いが生じる状況を調査した一連の研究により、笑いはメディアなどの刺激がない限りは、その大半が会話場面において表出され(Provine & Fischer, 1989)、しかも、冗談などが語られる「可笑しい」状況で笑うのは高々20%程度であり、大部分は「可笑しくない」状況で観察されている(Provine, 1993)。こうした「可笑しくない」笑い状況で表出される笑いが社会的相互作用において様々な機能を果たしていると考えられる。これらの機能として、会話を調和させるため(Ekman, 1985 工藤力訳 1992)、他の感情を隠蔽するため(Ekman & Friesen, 1982; Ekman, Friesen, & O'Sullivan, 1988)、口論での対立を避けるあるいは緊張を軽減するため(Ikuta, 1999)、相手を操るあるいは欺くため(Keating & Heltman, 1994)、相手をなだめるため(Hecht & LaFrance, 1998)などが挙げられる。社会的機能を持つ笑いを表出する側の感情状態を明らかにするために、桐田・遠藤(1999)は日常生活における笑いの表出状況について、日誌法を用いて検討している。その結果、笑いの原因の多くは明確に意識化されていないが、社会的な状況での笑いは、笑う側の他者志向性や演技性に関連することが示唆されている。さらに具体的に、押見(1999)は社会的スキルとしての作り笑いを考察する実証的研究として、作り笑いの意図や目的によって、日常生活において見られる作り笑いの行動項目を収集し、作り笑い尺度の作成を試みている。その結果、不愉快さや悲しい気持ち、罰の悪い思いなど、ネガティブな

感情を解消ないし隠蔽する意図の「感情制御」の作り笑いと、他者を和ませることで場の緊張した雰囲気や解消したり、場を盛り上げようとしたりする意図の「雰囲気操作」の作り笑い、さらに他者の行為を矯正・統制しようとする意図の「行為統制」の作り笑いがあることを明らかにしている。このことから作り笑いは、対人関係において何らかの個人的目的を達成ないし促進するために、自己に注意を向けて行動の自己調整に積極的に従事するという自己フォーカスの性質を有するといえる。また、そのまま表出すると自分にとってマイナスの効果をもたらす感情を隠蔽するなどの社会的受容の性質を持ち、さらに冷笑・嘲笑の作り笑いのように自己の価値判断に強く依存した自分本位の自己中心性の性質を持つ反応であると考えられる（押見, 1999）。また、押見（2002）は作り笑いが生じる状況の対人関係の親密さや、公的自己意識が作り笑いの表出行動に影響を与えることを見出している。福島（2008）は微笑が受け手にもたらす機能を探って、微笑に対する意識について調査し、微笑に対する意識と、他者と円滑な対人関係を形成・保持していくために必要な社会的スキル、および対人葛藤場面における対処方略の関連について検証を行っている。その結果、微笑には心理社会的効果、感情表出・隠蔽、社交上の笑い、機転の機能が見出され、これらの機能は社会的スキルと関連せず、対人葛藤方略と関連していると検証されている。このことに対して福田（2008）は、微笑で感情を表出・隠蔽して、微笑は社交上の笑いであると思っている人ほど対人葛藤場面で服従や回避の方略をとっており、自己主張せず他者の要求に従ったり、感情を微笑で隠したりしてその場を取り繕い不一致を回避していることが示唆されたと考察している。

これらの研究は快感情を伴わない笑いの表出者を対象としている。表出側の意図についての研究から、社会的な場面において笑いを正確に理解するための基礎的な知見が得られる。しかしながら対人相互作用の過程においては、他者の表情以外の文脈的情報源が極めて少ない場合も存在する。この場合に観察者は他者の笑いをどう判断するのだろうか。楽しさから生まれる

笑いと、そうでない笑いと比較すると、それらの差異は微細であるが、自然な笑いは作り笑いでは容易に真似できない特徴を持っている。IVでは、この自然な笑いと作り笑いとの違いに関する研究を概観していく。

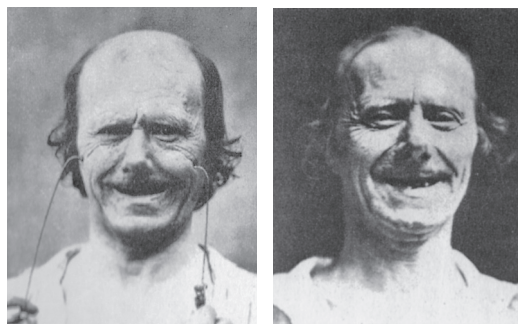


図1. デュシェンヌの笑い
(Duchenne, 1862/1900)

IV. 自然な笑いと作り笑いの差異

百年以上も前に、フランスの神経学者デュシェンヌ・デ・ブローニユは顔面筋肉の収縮が顔の様相の変化に与える研究をする際に、本当に楽しんでいる笑いと楽しんでいる笑いの違いを偶然に発見した（Duchenne, 1862/1990）。Duchenne（1862/1990）はこの違いについて「正直な喜びの感情は大頬骨筋（*zygomatic major*）と眼輪筋（*orbicularis oculi*）がいつしよに収縮する表情となって顔に現れる。前者（図1.左）は意思に従うが、後者（図1.右）は魂のやさしい感情によってのみ動かされる。偽りの喜びである嘘の笑いでは後者の筋肉を収縮させることができない……目の周りの筋肉は意思には従わない。真の感情や同意できる感情によってのみ動かされるのだ。笑っているときに、その部分が動いてなければ、愛想笑いしている証拠である（pp.72）」と述べている。その後 Ekman, Roper, & Hager（1980）の研究は、誰も眼輪筋を自発的に収縮させることができないというデュシェンヌの主張を確認している。しかし、意図的に収縮させるのが難しいのはその筋肉の外側の部分だけであることが確認されている。すなわち作り笑い（*unfelt smile*）においては、眼瞼部（*pars palpebralis*）の活動はほとんど発生しないが、強い笑いやネガティブな感

情を隠す笑いには眼窩部 (*pars orbitalis*) の活動を伴うことがある (Ekman & Friesen, 1982)。眼輪筋 (特に眼瞼部) の収縮は目尻周りにしわ (いわゆる crow's feet, カラスの足跡) を生ませ、頬を持ち上げ、目の下の皮膚を膨らせ、眉毛を引き下げ、目を細めさせることによって、瞼もいっしょに下に引っ張られる (Frank, 2002)。眼輪筋の収縮を伴う笑い (いわゆるデュシェンヌ微笑) は表出者の楽しさの内省報告の増加にしたがって増加し (Ekman, Davidson, & Friesen, 1990), その表出者が他者からポジティブな気分と判断され (Scherer & Ceschi, 2000), ポジティブな情動と同じような神経活動を行うことが確認されている (Davidson, Ekman, Saron, Senulis, & Friesen, 1990; Ekman et al., 1990; Fox & Davidson, 1988)。また, Ekman, Hager, and Friesen (1981) は, 「笑え」と教示されたときの作り笑いが, 冗談に対する反応としての楽しい笑いに比べて非対称的であることを見出している。その後, Skinner & Mullen (1991) はメタ分析を用いて同様の結果を見出している。

これらの研究において, 自然な笑いと作り笑いの静的な (static) 差異が注目されている。一方で, 動的な (dynamic) 特性も表情の識別に重要な役割を果たしていると考えられている (例えば, Bassili, 1979; Bruce & Valentine, 1988; Kamachi, Bruce, Mukaida, Gyoba, Yoshikawa, & Akamatsu, 2001; Wehrle, Kaiser, Schmidt, & Scherer, 2000)。自然な笑いと作り笑いの動的な差異について, Ekman & Friesen (1982) は自然な笑いの持続時間が500~400 msであるのに対して, 作り笑いの持続時間がそれより短かったり長かったりすることを指摘している。さらに, この持続時間を開始期 (onset, 笑い表出から最大限までの時間), 頂点期 (apex, 最大限の笑いの表出から減少する前の時間), 相殺期 (offset, 頂点から表出終了までの時間) の3つの期間に細かく分けることができ, 作り笑いが快感情に喚起された自然な笑いより開始期, 相殺期の時間が短いことが検証されている (Ekman & Friesen, 1982; Hess & Kleck, 1990; Schmidt, Ambadar, Cohn, & Reed, 2006)。特に, 作り笑いは不規則な動きが多く, 開始期と

相殺期が突然で躊躇うように見え, 自然な笑いより段階的でスムーズではないと特徴づけられている (Bugental, 1986; Weiss, Blum, & Gleberman, 1987)。この他, 中村 (2000) は自然な楽しい笑いを作り笑いの表出差について, 目と口, 腹部における笑い表出の開始時間差を分析する実験を行っている。ビデオ記録に加え, 眼輪筋及び大頬骨筋に筋電図, 呼吸曲線を記録し, YG性格検査の得点で被験者を社交群と非社交群に分類している。コメディビデオを見せた時の自然な笑い, 面白くないコメディビデオを見せた時の作り笑い, 教示のみによる単純な作り笑いを比較した結果, 3種類の笑い間で眼と呼吸の時間差に有意差がみられ, 女性非社交群と男性社交群で眼と口の時間差にも有意差が見られている。

笑いの表出過程は極めて早い。自然な笑いを作り笑いの動的な差異は社会的規則に帰すが, それよりも表出者の基本的感情状態の下で生じた結果であると考えられる。Schmidt, Cohn, & Tian (2003) は, 自然な笑いを作り笑いの動的な差異が自動顔分析に適用しないことを指摘している。その一方, 日常生活において表出される笑いは静止ではないため, 動的な差異を生かすことは, 笑いの観察者を対象としている笑い識別の実験的研究の刺激作成に役に立つと考えられる。

以上で述べたように, 快感情を伴う自然な笑いは快感情を伴わない作り笑いで容易に真似できない静的な特徴と動的な特徴を持っている。社会生活において, われわれは笑いの表出者でありながら笑いの解読者でもあり, 自分の笑い表出を経験しながら他者の笑いを解読している。笑いは表情表出の中でも最も頻繁に見られるものであり, 人生の早い段階で現れる (Ekman, 1985 工藤力訳 1992)。Vでは社会的笑いの発達について述べていきたい。

V. 社会的笑いの発達

人間が生まれてすぐに見せる笑いは自発的微笑と呼ばれるもので外界刺激とは無関係に生じる。生後1年間の間に, 赤ん坊にはデュシェンヌ笑いというでない笑いが両方生じる。赤ん坊の観察によるデュシェンヌ笑いの出現は早産児

(Rosenstein & Oster, 1988), 満期産児 (Emde, McCartney, & Harmon, 1972; Messinger, Dondi, Nelson-Goens, Beghi, Fogel, & Simion, 1998), そして生後3週間 (Wolff, 1987) に報告されている。生後1ヶ月以内において、デュシェンヌ笑いの出現は比較的稀であり、ほとんどの新生児の笑いと同じように睡眠時間に表れる。

生後2ヶ月から3ヶ月までの間に、赤ん坊の起きている時間帯にも笑いの出現が観察され、その頻度と持続時間は共に増加する。早い時期の乳児は笑いを母親の顔や声のような視覚聴覚の刺激に対する反応として表すが、生後3ヶ月頃になると、簡単な刺激では有効に赤ん坊の笑いを引き出せなくなる。この時期の赤ん坊は、毎日のよくある挨拶、社会生活の習慣的行為(たとえば、母親との対面遊び)、社会的ゲーム(たとえば、いないいないばあ)によって笑いを表出するようになる (Emde & Harmon, 1972; Kaye & Fogel, 1980; Sroufe, 1995; Wolff, 1987)。

生後2ヶ月から5ヶ月までの間に、赤ん坊は母親の笑顔を見たときや母親との対面遊びにおいて母親を凝視したときにデュシェンヌ笑いを表出する (Fogel, Dickson, Hsu, Messinger, Nelson-Goens, & Nwokah, 1997; Messinger, Fogel, & Dickson, 1997)。また、Messinger, Fogel, & Dickson (1999) が子どもと母親との対面相互作用を観察した結果、生後2ヶ月から6ヶ月の間に、赤ん坊はデュシェンヌ笑いより先に、口元の動きのみ伴う笑いが連続して起こることが明らかになっている。生後10ヶ月の赤ん坊は知らない人が近づいてくると笑うが、目の周りの筋肉は動かない。ところが、母親が近づいてきたときには、目の間の筋肉もすることが確認されている (Fox et al. 1988)。1歳児になると、赤ん坊のデュシェンヌ笑いが他の笑いと比べて、母親とのもの遊びや父親との読書行動において多く表れる (Dickson, Walker, & Fogel, 1997)。

以上の先行研究をまとめると、乳児の早い時期の笑いは主に外界をとらえ受けとめることに使用され、特定の愛着対象からの働きかけに受動的に反応したものが多く、楽しい感情状態の

表出であると考えられる。一方、笑いという手段を用いて、他者との相互コミュニケーションを行うための発達的变化も見られるといえる。10ヶ月の赤ん坊が寝転がったままで知らない人に心から笑いかけるとは思いがたいが、この年齢になると、社交的な笑みを浮かべることができるようになる。情動の社会過程理論 (social process of emotion, Dickson, Fogel, & Messinger, 1997; Fogel, Nwokah, Dedo, Messinger, Dickson, Matusov, & Holt, 1992; Fogel, Nwokah, & Karns, 1993) によると、人々の行動パターンは外界からの影響を受けるだけではなく、とりたてコミュニケーションによって影響を受けている。すなわち、どのようなコミュニケーションをとりたてかによって、行動パターンは変わってくる。生後10ヶ月の赤ん坊の見知らぬ人に向けた「愛想笑い」は情動の社会理論を支持するものと考えられる。赤ん坊はこの社会的ダイナミックスの影響を受け続け、次の段階ではどんどん自分の世界を広げていく。2歳ごろから子どもは世界を広げ、周囲の子どもにも親しみを感じるようになる、子ども同士の笑いが生じるようになる (友定, 1993)。2歳児になって笑いを他者との関係で能動的に使用することができるようになっていき、まだ明確な「社会意識」といえるものは獲得していないが、自分を他者との関係で意識することに伴った笑いが出現し始める (友定, 1992)。そして3歳児になると、相手の共感を引き出すことを目的としたような笑いが現れることが明らかになっている (恩田・松澤, 2007; 友定, 1993)。幼稚園児は他者から期待はずれの贈り物を受け取ったときに失望の感情を隠すために笑いを表出することが確認されている (Cole, 1986; Josephs, 1994)。笑い表出の発達に伴って、幼児は笑いに対する識別力も身につけている。心の理論 (Harris, 1990; Taylor, 1996) によって、学齢前の子どもは本心と表面的な情動を区別できるようになる。Josephs (1994) は物語の主人公の表面的な表情を絵で提示し、本当の感情を解読できるかどうかの課題を行った結果、4歳児と5歳児は主人公の本当の感情を正確に解読できることを確認している。課題の読解や記憶的の負荷を軽減するために、Banerjee, (1997) は同様の

課題を面接方式で行った。その結果、3歳児もこの識別能力を持っていることが報告されている。この3歳児のような早い段階で本心を解読できることは、深い意味を持っている。学齢前の子どもは本心と表面的な表情について言葉で表現することが困難である。特に、他者に自分の感情を隠す理由とその状況をあげること (Saarni, 1989) や、その隠された本当の感情の正当化 (Harris, Donnelly, Cuz & Pitt-Watson, 1986) については堪能ではない。それに対して、6歳児の多くは他者に自分の感情を隠す状況とその理由を述べることができ (Saarni, 1989)、顔面表情の制御によって他者を惑わせることまで理解している (Gross & Harris, 1988)。このような知識の発達は児童後期まで続き、10-11歳児は相互作用の友好関係の程度、社会地位の差異、本当の感情の強さなどのような様々な表情制御に作用しうる要因を考慮できるようになっている (Saarni, Mumme & Campos, 1998)。他の子どもの本当の気持ちを知らために、子どもは表出された顔面表情にだけでなく、模倣あるいは隠された表情にも注目しなければならない (Gosselin, Perron, Legault, & Campanella, 2002)。Ⅵでは、発達の視点を入れて笑い識別に関する研究を紹介していく。

Ⅵ. 笑いの識別

観察者の自然な笑いと作り笑いとの差異の気づきについて、Darwin (1872/1998) 以来、いくつかの研究がなされている。情動的表情の識別に関する判断の研究は主に欺くことを見抜く能力に焦点を当てている。これらの研究では、参加者に対して協力者の短いビデオを見せ、ビデオにおいて協力者が本当の感情を正直に表出しているのか、感じた感情を隠しているのか、他の情動を模倣しているのかについての判断を求めた (Ekman & Friesen, 1974; Ekman & O'Sullivan, 1991; Gosselin, Kirouac & Doré, 1995; Hess & Kleck, 1994)。その結果、大人でも提示された顔面表情は本心かどうかについての判断が困難であることが明らかになっている。Soppe (1988) は似たような方法を用いて、隠蔽と模倣の表情を見抜く能力の発達を検証した結果、6歳から12歳児はネガティブ感情の隠

蔽と抑制を見抜くことができるが、ネガティブ感情の模倣、ポジティブ感情の隠蔽、抑制と模倣については見抜くことができない。それに対して、大人はネガティブ感情の模倣以外のすべてのだます表情を見抜くことができることが明らかになっている。

しかし、これらの研究では、解読者が顔のどの部分の動きに注目して判断を下すのかについては明らかにされていない。言い換えると、これらの研究では解読者が本心とだます表情をどのように区別しているのかについて、具体的な検証が行われなかった。それに対して、Frank, Ekman, & Friesen (1993) は、大人が自然な笑いを作り笑いを識別するときに頬の上がる具合と笑いの持続時間差に対する反応について調査している。参加者は楽しい話をしながら笑っている人物と楽しくない話をしながら笑っている人物の短いビデオを見せられた。刺激材料において自然な笑いは頬の上がり、口元の引っ張りがあり、適度な持続時間を持つ一方、作り笑いは口元の引っ張りのみがあって、非常に短いあるいは長い持続時間となっている。その結果、大人は頬の上がりに、より反応することが明らかになっている。特に口元の動きのみがある人物より頬の上がり口元の引っ張りが両方あった人物のほうが楽しい笑いだと判断する傾向があると報告されている。さらに、参加者は眼輪筋の収縮を伴う笑いが多数の人格特性を表す項目において、眼輪筋の収縮を伴わない笑いよりポジティブに評価されている。同様の研究としては空港での荷物紛失という場面を設定した Scherer and Ceschi (2000)、自然な笑い・作り笑い・ニュートラルな顔、それぞれのモデルの着ている T-シャツに対する評価を用いた Peace, Miles, & Johnston (2006) があげられる。また、社会的場面を表したゲームを用いて、笑い識別の行動までの影響を検討する研究として、Krumhuber, Mansread, Cosker, Marshall, Rosin, & Kappas (2007) は、自然の笑いを作り笑いの表出の時間差を利用し、真顔、自然な笑い顔 (開始期、相殺期が長い)、作り笑い顔 (開始期、相殺期が短い) のアニメーションをパソコンによるビデオクリップを用いて、ペアでの信頼ゲームを行い、笑いの差異は社会的交換場

面において信頼及び協力行動の決定に影響を与えるかどうかを検証している。その結果、顔面表情の差異はパートナーの選択と協力への意思決定に影響することが立証されている。自然な笑いを表出する人物がパートナーとして選ばれることが多く、さらにより多くの協力を得られることが明らかになっている。

Bugental, Kopeikin & Lazowski (1991) は大人と交流するとき子どもの楽しい笑いと愛想笑いに対する視覚の反応について研究した。楽しい笑いは頬の上がりりと口元に引っ張りを持つ笑いとして定義され、愛想笑いは頬の上がりりが同時に生じない笑い、ネガティブな感情を伴う笑い、そして会話調整とかかわる行動ユニットを伴う笑いとして定義されている。子どもの凝視は年齢と虐待経験に関連することが明らかになっている。7歳以下の非虐待家族の子どもは愛想笑いに視線を避ける。10歳児の場合、非虐待家族の子どもは愛想笑いに視線を避けないが、楽しい笑いに持続して注目している。一方、これらの発達の変化は虐待を受けた子どもには見られていない。研究に参加したすべての虐待家族の子ども(3歳～13歳)は愛想笑いに視線を避けている。

Bugental et al. (1991) はこの非虐待家族の子ども達の発達の変化を、楽しい笑いを作り笑いの重要性に対する理解の発達の反映として考察している。愛想笑いは、年少の子どもに対しては、意図を理解できないものとして認識された結果、社会的脱退 (social withdrawal)、つまり視線の回避となり、年長の子どもに対しては、ささいなありふれたごまかしとして認識されている。この研究で見出された3歳から6歳児の凝視行為パターンから子どもたちは楽しい笑いと言語愛想笑いを識別していることが示されているが、年長の子ども (10歳~13歳) はこの2種類の笑いを楽しみ笑いあるいは愛想笑いとして解釈しているかどうかについて考察していないため、年長の子どもが笑いの識別に関する知識を持っているとはっきり言えない状態である。

近年、子どもの笑い識別の手がかりに注目し、子どもと大人の笑い識別能力を比較する研究もなされている（たとえば、Del Giudice & Colle, 2007; Gosselin, Beaupré, & Boissonneault,

2002; Gosselin et al., 2002; Thibaut, Gosselin, Brunel, & Hess, 2009)。これらの研究の結果が一致していないため、子どもの笑い識別力についてはまだ確証が得られていない。子どもは大人ほどの笑い識別力を持っていなくても、表出者の一定の顔面動きを手がかりとして表情認知を行っている。笑いに対する反応を適切に測定できる理想的な刺激状況は何か、この識別力は幼児期のどんな発達段階で現れたか、この識別力の発達に影響する要因は何かなどは、今後研究が展開していく中で明らかにされなければならない課題である。

社会的笑いに関する心理学研究を概観すると、これらの研究の多くは主にアメリカやヨーロッパでのみ行われていることに限っている。すなわち、これらの研究では、表情解読の文化差についての検証が行われていない。しかし、笑いの表出は、文化と深く関わっており、多くの文化において笑いは、様々な形で儀礼的に制度化されている。よって、笑いの研究を行うにあたっては、社会的生活に適応するための文化を理解し、文化差へ配慮することが必要となってくる。Ⅶでは、笑いと文化について述べていく。

VII. 笑い と 文化

笑いの文化差の問題に対してThibault, Leveaque, Gosselin, & Hess (2007) はフランス系カナダ人と中国人の笑い識別について比較している。参加者は自分と同じ文化背景を持つモデルのデュシャンヌ笑いのない弱い笑い、デュシャンヌ笑いのない中程度の笑い及びデュシャンヌ笑いのある中程度の笑いが提示され、評価した結果、フランス系カナダ人がデュシャンヌ微笑によって笑いを識別するのに対して、中国人は同じ強度の笑いをデュシャンヌ微笑がなくても自然な笑いと判断する傾向にあることが確認されている。この結果は文化が笑い表出に影響を与えた結果と考えられるが、中国人の笑い識別力を実証する研究はまだ少ないため、さらなる研究が必要であると考えられる。一方、日本人の笑い識別率が低いことを言及した研究には中村(2000)があげられるが、その識別の過程を詳しく検証する研究はほとんど行われてい

ない。アメリカやヨーロッパにおいては表情を強く表出する文化が存在するのに対し、アジア圏においては違う表出文化及び民族特性が存在し、笑いに対する認知バイアスの差異が生じると考えられる。独特な笑い文化を持つアジア圏においての社会的笑いの機能や識別力についての研究も期待されている。

VIII. 結語

本稿は、これまでの社会的笑いに関する心理学研究を、①笑いの分類、②社会的笑いの機能、③自然な笑い作り笑いの差異、④社会的笑いの発達、⑤笑いの識別、⑥笑い文化の6つの視点から概観した。笑う人の感情状態に着目すると、笑いは快感情を伴う楽しい笑い、快感情を伴わない作り笑い、2種類に大別できる。社会的相互作用の場面において、単純に快感情を表現する笑いより、様々な社交機能を果たす笑いの方が重大な意義を持っていると考えられる。社会的笑いに関する心理学研究を概観すると、笑いの表出者を対象として、表出側の意図や目的から顔面動きの差異までの研究がたくさん行われている。一方、解読者を対象として、笑い解読過程に対する具体的な検証を行う研究がまだ始まったばかりで、観察実験に用いられるすべての変数をコントロールすることは難しい現状であり、今後笑いに対する反応を適切に測定できる理想的な刺激状況で実験を進めていく必要があると考えられる。また、子どもの笑い識別についての研究はまだ稀であり、今までの研究では一致な結果が得られなかったため、子どもの表情識別やその発達、及び笑い識別力の発達に影響を与える要因の解明は今後の課題である。さらに、笑い解読を行う際に生じた認知バイアスに影響を与える要因について、文化の差異以外に、解読者自身の特性も考えられる。独特な笑い文化を持つアジア圏においての社会的笑いの機能や識別力についての研究やその解読が社会的場面において観察者の行動への判断に至る影響についての解明も期待されている。

【引用文献】

- 浅田由美 (2004). 心理臨床場面における笑いの取り扱い——その効用と実際、展望について
九州大学心理学研究, **5**, 153-161
- Banerjee, M. (1997). Hidden emotion: Preschoolers' knowledge of appearance-reality and emotion display rules. *Social Cognition*, **15**, 107-132.
- Bassili, J. N. (1979). Emotion recognition: The role of facial movement and the relative importance of upper and lower areas of the face. *Journal of Personality and Social Psychology*, **37**, 2049-2058.
- Bruce, V., & Valentine, T. (1988). When a nod's as good as a wink: The role of dynamic information in facial recognition. In M. M. Gruneberg, P. E. Morris, & R. N. Sykes (Eds.), *Practical aspects of memory: Current research and issues* (Vol. 1, pp. 169-174). New York, NY: John Wiley & Sons.
- Bugental, D. B. (1986). Unmasking the "polite smile": Situational and personal determinants of managed affect in adult-child interaction. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **12**, 7-16.
- Bugental, D. B., Kopeikin, H., & Lazowski, L. (1991). Children's responses to authentic versus polite smiles. In K. J. Rotenberg (Ed.), *Children's interpersonal trust: Sensitivity to lying, deception, and promise violation* (pp. 59-79). New York: Springer-Verlag.
- Cole, P. M. (1986). Children's spontaneous control of their facial expression. *Child Development*, **57**, 1309-1321.
- Darwin, C. (1872/1998). *The expression of the emotions in man and animals* (3rd ed.). London: Harper Collins.
- Davidson, R. J., Ekman, P., Saron, C. D., Senulis, J. A., & Friesen, W.V. (1990). Approach-withdrawal and cerebral asymmetry: Emotional expression and brain physiology: I. *Journal of Personality and Social Psychology*, **58**, 330-341.
- Del Giudice, M. D. and Colle, L., (2007). Differences Between Children and Adults in the Recognition of Enjoyment Smiles, *Developmental Psychology*, **43**(3), 796-803
- Dickson, L., Fogel, A., & Messinger, D. (1997). The development of emotion from a social process view. In M. Mascolo & S. Giffen (Eds.), *What*

- develops in emotional development*, (pp. 253–273). NY: Plenum Press.
- Dickson, L., Walker, H., & Fogel, A. (1997). The relationship between smile-type and play-type during parent-infant play. *Development Psychology*, 925–933.
- Duchenne, B. (1862/1990). *The mechanisms of human facial expression or an electrophysiological analysis of the expression of emotions* (A. Cuthbertson, Trans.). New York: Cambridge University Press.
- Ekman, P., (1985). *Telling lies*. New York: W W Norton & Co Inc.
- (エクマン P. 工藤 力 (訳編) (1992). 暴かれる嘘 虚偽を見破る対人学 誠心書房)
- Ekman, P., Davidson, R. J., & Friesen, W. V. (1990). The Duchenne smile: Emotional expression and brain physiology: II. *Journal of Personality and Social Psychology*, 58, 342–353.
- Ekman, P., & Friesen, W. V. (1974). Detecting deception from the body or face. *Journal of Personality and Social Psychology*, 29, 288–298.
- Ekman, P., & Friesen, W. V. (1982). Felt, false, and miserable smiles. *Journal of Nonverbal Behavior*, 6, 238–258.
- Ekman, P., Friesen, W. V., & O'Sullivan, M. (1988). Smiles when lying. *Journal of Personality and Social Psychology*, 54, 414–420.
- Ekman, P., Hager, J.C., & Friesen, W.V. (1981). The symmetry of emotional and deliberate facial actions. *Psychophysiology*, 18, 101–106.
- Ekman, P., & O'Sullivan, M. (1991). Who can catch a liar? *American Psychologist*, 46, 913–920.
- Ekman, P., Roper, G. & Hager, J. C. (1980). Deliberate facial movement. *Child Development*, 51, 86–91
- Emde, R. N. & Harmon, R. J. (1972). Endogenous and exogenous smiling systems in early infancy. *Journal of American Academy of Child Psychiatry*, 8, 57–67
- Fogel, A., Dickson, K. L., Hsu, H., Messinger, D., Nelson-Goens, G. C., & Nwokah, E. (1997). Communicative dynamics of emotion. In K. C. Barrett (Ed.), *New Directions in Child Development: The Communication of Emotion: Current Research from Diverse Perspective*, 77, 5–24. San Francisco: Jossey-Bass.
- Fogel, A., Nwokah, E., Dedo, J., Messinger, D., Dickson, K. L., Matusov, E., & Holt, S. A. (1992). Social process theory of emotion: A dynamic systems approach. *Social Development*, 1, 122–142.
- Fogel, A., Nwokah, E., & Karns, J. (1993). Parent-infant games as dynamic social systems. In K. MacDonald (Ed.), *Parent-child play*. Albany, NY: SUNY press.
- Fox, N. A., & Davidson, R. J. (1988). Patterns of brain electrical activity during facial signs of emotion in 10-month-old infants. *Developmental Psychology*, 24, 230–236.
- Frank, M. G. (2002). Smiles, lies, and emotion. In M. H. Abel (Ed.), *An empirical reflection on the smile* (pp. 15–43). Lewiston, NY: Edwin Mellen Press.
- 福島明子 (2008). 笑いに対する意識と対人コミュニケーション 御茶ノ水大学人間文化創成科学論叢, 11, 399–411
- Giles, H., & Oxford, G. S. (1970). Towards a multidimensional theory of laughter causation and its social implications. *Bulletin of the British Psychological Society*, 23, 97–105
- Gosselin P., Kirouac, G., & Doré, F. Y. (1995). Components and recognition of facial expression in the communication of emotion by actors. *Journal of Personality and Social Psychology*, 68, 83–96.
- Gosselin, P., Beaupré, M. G., & Boissonneault, A. (2002). Perception of genuine and masking smiles in children and adults: Sensitivity to traces of anger. *Journal of Genetic Psychology*, 163, 58–71.
- Gosselin, P., Perron, M., Legault, M., & Campanella, P. (2002). Children's and adults' knowledge of the distinction between enjoyment and nonenjoyment smiles. *Journal of Nonverbal Behavior*, 26, 83–108.
- Gross, D., & Harris, P. L. (1988). False beliefs about emotion: Children's understanding of misleading emotional displays. *International Journal of Behavioral Development*, 11, 475–488.
- Harris, P. L., Donnelly, K., Guz, G. R., & Pitt-Watson, R. (1986). Children's understanding of

- the distinction between real and apparent emotion. *Child Development*, **57**, 895–909.
- 早川治子 (2000). 相互行為としての「笑い」——自・他の領域に注目して——文教大学文学部紀要, **14** (1), 23–43
- 早川治子 (2001). 「笑い」の分類に基づく数量的分析 文教大学文学部紀要, **14** (2), 1–24
- Harris, P. (1990). *Children and emotion: The development of psychological understanding*. Oxford, UK: Basil Blackwell.
- Hecht, M. A., & LaFrance, M. (1998). License or obligation to smile: The effect of power and sex on amount and type of smiling. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **24**, 1332–1342.
- Hess, U., & Kleck, R. E. (1990). Differentiating emotion elicited and deliberate emotional facial expressions. *European Journal of Social Psychology*, **20**, 369–385
- Hess, U., & Kleck, R. E. (1994). The cues decoders use in attempting to differentiate emotion elicited and posed facial expressions. *European Journal of Social Psychology*, **24**, 367–381.
- Izard, C. E. (1994). Innate and universal facial expressions: Evidence from developmental and cross-cultural research. *Psychological Bulletin*, **115**, 288–299.
- Josephs, I. E. (1994). Display rule behavior and understanding in preschool children. *Journal of Nonverbal Behavior*, **18**, 301–326.
- 角辻 豊 (1996). 笑いのちから——ストレス時代の快樂学 東京: 家の光協会
- Kamachi, M., Bruce, V., Mukaida, S., Gyoba, J., Yoshikawa, S., & Akamatsu, S. (2001). Dynamic properties influence the perception of facial expressions. *Perception*, **30**, 875–887.
- Kaye, K. & Fogel, A. (1980). The temporal structure of face-to-face communication between mothers and infants. *Developmental Psychology*, **16**, 454–464.
- Keating, C. F., & Heltman, K. R. (1994). Dominance and deception in children and adults: Are leaders the best misleaders? *Personality and Social Psychology Bulletin*, **20**, 312–321.
- 桐田隆博・遠藤光男 (1999). 会話における笑いの表出機能——“Laugh-speak”に着目して 電子情報通信学会技術研究報告, **33**, 1–6
- Krumhuber, E., Mansread, A. S. R., Cosker, D., Marshall, D., Rosin, P. L., & Kappas, A. (2007). Facial dynamics as indicators of trustworthiness and cooperative behavior. *Emotion*, **7**, 730–735
- Messinger, D., Dondi, M., Nelson-Goens, C., Beghi, A., Fogel, A., Simon F. (1998). Neonatal smiles. *Infant Behavior and Development*, **21** (special ICIS issue), 573.
- Messinger, D., Fogel, A., & Dickson, K. L. (1997). A dynamic systems approach to infant facial action. In J. A. Russell & J. M. Fernandez-Dols (Eds.), *The psychology of facial expression*. (pp. 205–228). NY: Cambridge University Press.
- Messinger, D., Fogel, A., & Dickson, K. L. (1999). What's in a smile? *Developmental Psychology*, **35**, 701–708.
- 中村 亨 (2000). 自然な笑いと作り笑いにおける表出の時間差の分析 電子情報通信学会技術研究報告, **1**, 1–8
- 恩田真弓・松澤正子 (2007). 幼児期における人に向けた笑いの発達 昭和女子大学生活心理研究紀要, **10**, 131–136
- 押見輝男 (1999). 社会的スキルとしての笑い 立教大学心理学研究, **42**, 31–38
- 押見輝男 (2000). 公的自己意識と作り笑い 心理学研究, **73**, 251–257
- Peace, V., Miles, L. & Johnston, L. (2006). It doesn't matter what you wear: The impact of posed and genuine expressions of happiness on product evaluation. *Social Cognition*, **24**, 137–168.
- Provine, R. R. (1993). Laughter punctuates speech: Linguistic, social, and gender contexts of laughter. *Ethology*, **95**, 291–298
- Provine, R. R., & Fischer, K. R. (1989). Laughing, smiling, and talking: Relation to sleeping and social context in humans. *Ethology formerly Zeitschrift für Tierpsychologie*, **83**, 295–305
- Rosenstein, D. & Oster, H. (1988). Different facial responses to four basic tastes in newborns. *Child Development*, **59**, 1555–1568.
- Saarni, C. (1989). Children's understanding of strategic control of emotional expression in social transactions. In C. Saarni & P. L. Harris (Eds.), *Children's understanding of emotion* (pp. 181–208). New York: Cambridge University Press.
- 坂本 栄 (1995). うつ病者の笑いの精神生理学的研究 大阪大学医学雑誌, **47**, 21–32
- 坂本 栄・河崎建人・志水 彰 (1992). うつ病者

- の笑いのポリグラフィー的研究 臨床精神医学, **21**, 1045-1050
- Scherer, K. R., & Ceschi, G. (2000). Criteria for emotion recognition from verbal and nonverbal expression: Studying baggage loss in the airport. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **26**, 327-339.
- Schmidt, K. L., Ambadar, Z., Cohn, J. F., & Reed, L. I. (2006). Movement difference between deliberate and spontaneous facial expressions: Zygomaticus major action in smiling. *Journal of Nonverbal Behavior*, **30**, 37-52
- Scherer, K. R., & Ceschi, G. (2000). Criteria for emotion recognition from verbal and nonverbal expression: Studying baggage loss in the airport. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **26**, 327-339.
- Schmidt, K. L., Cohn, J. F., & Tian, Y. (2003). Signal characteristics of spontaneous facial expressions: Automatic movement in solitary and social smiles. *Biological Psychology*, **65**, 49-66.
- 志水 彰 (2000) 笑い その異常と正常 東京: 勁草書房
- Skinner, M., & Mullen, B. (1991). Facial asymmetry in emotional expression: A meta-analysis of research. *British Journal of Social Psychology*, **30**, 113-124.
- Sroufe, L. A. (1995). *Emotional development*. NY: Cambridge University Press.
- 鈴木映二 (2001). 最近のうつ病診断と分類 こころの科学, **97**, 14-21
- Thibault, P., Gosselin, P., Brunel, M., & Hess, U. (2009). Children's and adolescents' perception of the authenticity of smiles. *Journal of Experimental Child Psychology*, **102**, 360-367
- Thibault, P., Levesque, M., Gosselin, P., Hess, U. (2007). *Wrinkles around the eyes or not? A cultural dialect for smile authenticity*. Manuscript submitted for publication.
- 友定啓子 (1992). 乳幼児における笑いの発達——1歳児から2歳児へ 日本家政会誌, **43**(8), 735-743.
- 友定啓子 (1993). 幼児の笑いと言達 勁草書房.
- Soppe, H. J. G. (1988). Age differences in the decoding of affect authenticity and intensity. *Journal of Nonverbal Behavior*, **12**, 107-119.
- Taylor, M. (1996). A theory of mind perspective on social cognitive development. In R. Gelman & T. Kit-Fong Au (Eds.), *Perceptual and cognitive development* (pp. 283-329). New York: Academic Press.
- Wehrle, T., Kaiser, S., Schmidt, S., & Scherer, K. R. (2000). Studying the dynamics of emotional expression using synthesized facial muscle movements. *Journal of Personality & Social Psychology*, **78**, 105-119.
- Weiss, F., Blum, G. S., & Gleberman, L. (1987). Anatomically based measurement of facial expression in simulated versus hypnotically induced affect. *Motivation and Emotion*, **11**, 67-81.
- Wolff, P. H. (1987). *The development of behavioral states and the expression of emotions in early infancy*. Chicago: University of Chicago Press.

A Review of Social Laughter

Shan Li
Shouzo Shibuya

Graduate School of Psychology, Meiji University
Faculty of Studies on Contemporary Society, Meiji University

Meiji Journal of Psychology, 2011 vol.7

[Abstract]

This article reviews psychology studies about social laughter/smile in view of ① classification of laughter, through which we can notice the emotional state of the displayer; ② function of social laughter/smile, which is being used as a social skill; ③ static and dynamic differences between spontaneous laughter/smiles with enjoyment and forced one without enjoyment; ④ development of social laughter/smiles from laughing as spontaneous reflection to laughing with sociality; ⑤ perception of laughter/smiles, with a developmental point, showing the necessity of establishment of children's sensitivity to posed and genuine laughter/smiles with certainty, since the result of preceding studies are different from each other; and ⑥ laughter/smiles and cultural, noting that the studies on smile perception had been restricted to Western countries, which is suggestive of a display rule that would need to be acquired during socialization in different cultures. Thus it is expected that the illumination of the social function and perception of laughter/smiles in Eastern countries, where there is a specific culture of laughter.

keywords : laughter/smiles, enjoyment smile, posed smile, social smile, social perception